41

旧約聖書和訳過程における鳥類名称の取扱いについて

水谷　惟紗久

聖書、とりわけ旧約聖書には動物名の記載が多い。そのなかに現れる動物は、紀元前十世紀以前の地中海、中近東周辺地域において見られたものが中心となっている。なかには、極東地域においては見られない種類のものも含まれているが、それらを含めて動植物名称を和訳する場合には、当時の時代背景から考えて、清末の聖書漢訳作業がしたように英訳聖書が参考にされたものと考えられる。和訳においては、さらにそれら漢訳聖書が参考に付されたことは間違いのないところであろう。

さて、幕末以来、日本においてもキリスト教聖書の翻訳活動がなされるに至った。新約聖書の翻訳が先行し、旧約聖書の完全な翻訳がなったのは明治二十一年（一八八八）のことである。

聖書の漢訳・和訳作業にあたっては“God”に代表される概念用語の訳出についても困難な論議が訳者らによってなされたことが知られているが、動植物名称についても、混乱が多く、明治期の聖書以来、現行聖書に至るまで、同じ個所の名称が次々に変更されている。

動植物の名称と現物とを同定する作業は、前近代より本草学の領域においては不可欠のことである。したがって、漢訳聖書を介して動植物の名称を和訳しうる背景として、江戸期に蓄積された本草の知識が存在したことには高い蓋然性が認められる。現在、和訳聖書に見られる動物名称の異同について包括的な調査を行っているところであるが、本報告においては、聖書に現れる動物名称のうちで、旧約聖書に見られる鳥類名称を対象として、その異同について検証を試み、翻訳作業にかかわった日本人が同時代の中国人と、どの程度、動物名称について共通認識を有していたのかを明らかにする。

すでに旧約聖書の和訳が始まった時期までの間、一定の知識人には聖書の内容がある程度知られていたとされている。明治期に入ってからの和訳聖書は、幕末のそれ

と異なり、相応の教養を身につけた日本人がこれにあたったことが特徴だと考えられる。実際に、漢訳聖書を参照する上においては、漢籍の読解能力が求められるが、聖書和訳に関与した日本人は、かなりの程度の漢籍読解能力を有しており、和訳作業にあたっても、彼らの能力が大きく寄与したと思われる。

旧約聖書は、明治十五年（一八八二）以来、ヘボンらによって分冊されて次々に刊行されていたが、最終的に完訳を果たした「聖書本文の翻訳、改訂、出版および保存のための常置委員会」が残した訳本は、現行の『文語訳聖書』のうちの旧約聖書と基本的に同内容であり、その後の和訳聖書に絶大な影響を与えている。この和訳作業にあたった日本人は、当初限られていたが、植村正久ら有志の尽力によって、事実上、日本人自らの手になる翻訳となったことが知られている。

この、委員会本・旧約聖書における鳥類名称の検証にあたっては、同書と、同時代に刊行された漢訳聖書である『旧約全書』（同治四年・一八六五・蘇松上海美華書館）他の漢訳、および、漢訳聖書が編集、刊行される際にも一般的に参照された英訳聖書、いわゆる『欽定訳聖書』（キング・ジェームズ版）、そしてヘブル語などを対照する作業を行った。

最初の漢訳聖書としては、モリソン訳『神天聖書』（道光三年・一八二三）があり、日本にも伝わっているが、マラッカで刊行され、中国国内で作業がなされた訳ではないこと、中国人へのいち早い布教を最優先に翻訳作業がなされたため、動物名称など細かい点において齟齬がありうると考えられる。しかし、幕末来、次々に和訳された聖書に、本書の影響が大きかったことは否定できず、この点についても若干の指摘をする。

なお、イスラエル周辺地域に生息している鳥類については“The Birds of Israel”（Uzi Paz, 1987, HELM, London）を参照した。

（（株）日本歯科新聞社）